

令和7年度
福島県 大学生と集落の協働による地域活性化事業

大学生の力を活用した集落復興支援事業
実態調査(1年目)
業務実施報告書

調査地
会津若松市河東地域

2026年2月
会津大学短期大学部
産業情報学科経営情報コース
成澤ゼミ

目次

1. はじめに	2
2. 河東地域の概要	2
3. 実態調査活動の概要	3
4. 調査のまとめ	4
5. 地域課題と提案	11
6. おわりに	12



1. はじめに

私たち成澤ゼミは、会津大学短期大学部産業情報学科経営情報コースに所属し、経営情報に関する諸分野を中心に学んでいる。ゼミには、農業・観光などの地域産業や、食文化・伝統芸能といった地域文化に関心を持つ学生が集まり、地域資源を活かしたまちづくりと産業振興をメインテーマに活動している。

今年度の活動として、私たちは会津若松市河東地域における実態調査に取り組んできた。メンバーはゼミ2年生全員（会津若松市3名、喜多方市2名、郡山市1名、計6名）で構成されている。指導教員の成澤徳子先生は、私たちの入学と同時期に本学へ着任されたため、私たちはゼミ1期生にあたる。成澤先生は地域研究、人類学、社会調査を専門とされており、ゼミ生に対しても、地域住民の方々から直接お話を伺うフィールドワークの手法を推奨されている。そのため、教室での座学に留まらず、意欲的に学外へ飛び出すフットワークの軽さが本ゼミの大きな特色である。

本事業に応募した直接的なきっかけは、ゼミが始動した昨年度秋、会津若松市役所河東支所（まちづくり推進グループ）を通じて、河東地域づくり委員会より打診をいただいたことにある。次章で詳述するように、同地域では次期地域づくりビジョンの策定を控えており、若者の視点を活かしたまちづくりが喫緊の課題となっていた。このニーズが、フィールドワークを通じた課題解決を掲げる私たちの活動目的と合致したため、地域貢献と実践的な学びを志し、応募に至った。

河東地域は本学と同じ会津若松市内に位置し、キャンパスからも至近である。しかし、調査を通じて改めて地域を歩いてみると、身近でありながら未だ知らない魅力や課題が多く存在することに気付かされた。住民の方々との交流を通じ、地域の価値を再発見するとともに、それらを主体的なアクションへと繋げていくことを目指し、本活動を展開した。

2. 河東地域（旧河東町）の概要

河東地域は会津若松市の北部に位置し、面積は約40km²である。東西に約12km、南北に約8kmと細長い形状をしており、東から西にかけて標高が低くなる傾斜地としての特徴を持つ。地域内には、喜多方市や磐梯町との境を流れる日橋川をはじめ、大工川、金山川、湊川の4河川が流れている。

交通インフラについては、JR磐越西線の東長原駅、広田駅、堂島駅の3駅を有している。路線バスは「塩川・喜多方線」や「河東・湊線」に加え、河東地域づくり委員会が運営主体となる地域内交通「みなづる号」が運行されている。また、磐越自動車道の磐梯河東インターチェンジも所在しており、交通の利便性は比較的高い。

地名の由来は、会津盆地を流れる大川（阿賀川）の「東」に位置することに因む。「河」は大河のごとき雄大さを、「東」は朝日のような躍進を象徴し、地域の発展への願いが込められている。旧河沼郡河東町は2005（平成17）年11月に会津若松市と合併した。同地域

は大きく 3 つの地区（日橋、八田、堂島）に分けられ、3 地区を合わせて計 53 の集落によって構成されている。人口は計 7,626 人、2,527 世帯である（2020 年時点）。

河東地域には、皆鶴姫伝説をはじめとする古い歴史と伝統が今なお息づいている。美しい自然と豊かな土地に恵まれた同地域では、古くから農業が盛んである。一方、豊富な水資源を活用した製造業の誘致や、高速道路網による物流・産業インフラの強化を背景に、工業も着実な発展を遂げてきた。大正・昭和期からの大規模工場の立地に加え、会津若松市との合併後には「会津若松河東工業団地」が整備されるなど、同地域は現在も地域経済を牽引する重要な役割を担っている。

同地域では、合併から 7 年が経過した 2013（平成 25）年 6 月、身近な地域課題の解決に向けて、住民と行政が協働で取り組む「河東地域づくり委員会」が設立された。以来、同委員会は地域環境、生活福祉、防犯・防災、交通環境など、多岐にわたる分野でまちづくりを展開してきた。2021（令和 3）年 3 月には、住民主体による持続的な活動を推進するため「河東地域づくりビジョン」を策定し、各種団体と連携しながら課題解決に向けた諸事業を進めてきた。

今年度、この第 1 期ビジョンが期間満了を迎えるにあたり、これまでの活動を総括し、第 2 期ビジョンを策定する重要な局面にある。しかし、同委員会では会員の高齢化が進行しており、次代を担う若者の視点をいかに地域づくりに反映させるかが大きな課題となっていた。こうした背景から、会津地域出身の学生が多く在籍する当ゼミに対し、「将来の居住者」としての視点を含む多様なアイデアを提案し、委員会と共に河東地域の未来を描いてほしいという期待が寄せられ、本事業に協働で取り組むこととなった。

3. 実態調査活動の概要

こうした背景に基づき、当ゼミでは地域の現状把握と課題抽出のため、河東地域を視察した。今年度実施した主な活動は以下の通りである。

年月日	場所	内容
2025 年 5 月 13 日(火)	河東公民館	地域イベント「みなづる号 de こびるにすんべ！」参加
	八葉寺	歴史・文化の調査①
	塩庭多目的集落センター	6 次産業化に取り組む農業者にインタビュー①
	皆鶴姫の碑	歴史・文化の調査②
	藤倉二階堂	歴史・文化の調査③
2025 年 8 月 6 日(水)	大和田多目的集落センター	外国人移住者へのインタビュー
	東高野集会所	サロン「さくら会」との交流会
	大和田八幡神社	歴史・文化の調査④
	岡田多目的集落センター	若手農家との懇談会

2025 年 8 月 7 日(木)	河東支所 会議室	6 次産業化に取り組む農業者にインタビュー②
		河東地域づくり委員会との交流会
	古川プラスチック	地元企業の視察①
	(株)サンブライト会津河東工場	地元企業の視察②
2025 年 11 月 8 日(土)	河東公民館	河東地区文化産業祭に参加
2025 年 11 月 9 日(日)	岡田多目的集落センター	岡田地区の収穫祭に参加
2025 年 11 月 18 日(火)	河東支所 会議室	河東地域づくり委員会「みなづるプロジェクトワークショップ」参加
2026 年 1 月 15 日(木)	河東支所 会議室	河東地域づくり委員会と成果報告会

4. 調査のまとめ

4.1 歴史探訪

5 月 13 日、河東地域の名所である八葉寺、皆鶴姫の碑、そして藤倉二階堂を訪ねた。

同地域の歴史は、約 3 万年前の旧石器時代まで遡る。大野原地区ではとりわけ旧石器や縄文時代早期の遺跡が数多く確認されており、古くから人びとの営みがあったことが分かる。奈良・平安時代には、陸奥国多賀城の管轄下にある「会津郡」の中心として、河東町郡山に郡役所（郡衙）が置かれていたという説が有力視されており、まさに地域の要所であったことがうかがえる。

10 世紀、仏教文化が花開く中、京都からこの地を訪れた空也上人によって冬木沢に八葉寺が建立された。「会津高野山」の別名を持つこの寺院では、盆迎えの行事「冬木沢参り」の拠点として今も多く多くの参拝客が訪れる。境内の舍利殿には、故人の遺骨や遺髪などを納めた約 1 万 5 千基もの小さな五輪塔が安置されていると聞き、死者を偲ぶ人びとの深い信仰の姿に圧倒された。上人が広めた念仏信仰は、現在も冬木沢集落の方々による「空也念仏踊り」（福島県指定重要無形民俗文化財）として継承されている。今回は、河東地域づくり委員会のメンバーで自らも踊り手として教えを繋ぐ方にご案内いただき、「生きた伝統」に触れる濃密で有意義な学びのひとつとなった。



諸陵山八葉寺の阿弥陀堂（左）と舍利殿（右）



上人が伝説的に掘り当てた「空也清水」



貴重な解説を必死に記録中

また、河東地域には中世から近代に至る歴史的な事件や伝承も重層的に存在している。平安末期には、源義経を慕って京から追ってきた皆鶴姫の伝説があり、藤倉地区には今も供養碑が遺されている。義経の初恋の人とも伝えられる姫がこの地で病に倒れ、哀しみの果てに難波池に身を投じたという悲恋の物語に触れ、その場にいた誰もが深く想いを馳せた。



市指定史跡「皆鶴姫の碑群」



供養碑の周りには広大な田園風景が広がる

戦国時代の1589年、蘆名氏が「摺上原の戦い」で伊達政宗に敗れた際、蘆名家の陣地近くであった八葉寺は焼き討ちにあった。現在の阿弥陀堂はその後再建されたもので、藤倉地区の延命寺地藏堂とともに国の重要文化財として今にその姿を伝えている。地藏堂は室町時代中期の建物と推定され、屋根が唐様の重層建築で二階建てのように見えることから「藤倉二階堂」の呼び名で親しまれている。



延命寺地藏堂（藤倉二階堂）



地藏堂の境内に安置されている石造六地藏尊

さらに、幕末の戊辰戦争においても大野原地区が白虎隊の戦場となるなど、この地は常に歴史の転換点にあった。今回の見学は、数万年前から続く悠久の時の流れと、時代に翻弄された人びとの足跡を再確認する貴重な機会となった。

4.2 農業の6次産業化

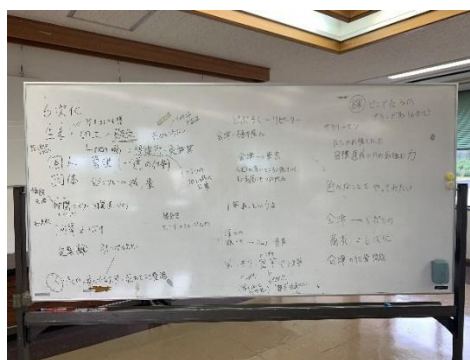
農業の6次産業化は、農家の所得向上のみならず、地域特産品の開発を通じた地域経済の活性化に寄与する可能性を秘めている。河東地域は水稻栽培が盛んであり、標高の高いエリアは良質なソバの産地としても知られている。しかし、同地域において6次産業化に成功している事例は極めて少ないのが現状である。そこで、6次産業化における課題を明らかにするため、同地域の農家で6次化商品づくりに取り組む代表的な生産者2軒に対しヒアリング調査を実施した。

5月13日、米（コシヒカリ・もち米）や野菜を栽培し、自社原料による加工販売を手がける「もちはもち屋」の代表に話を伺った。同店では、余剰米の有効活用を目的として自宅敷地内に加工場を設置し、白餅の生産を開始した。当初は赤字経営が続いたものの、米粉と地元産リンゴジュースを用いた「かりんとう」や、郷土料理である「凍み餅」を新たに開発。現在は地域の病院内売店や各種イベント等へ販路を拡大している。次いで8月7日、予約制の蕎麦屋「茱萸木庵」の代表に話を伺った。店主は50歳で脱サラして就農した経歴を持ち、手打ちの十割生蕎麦に加え、自家製のどぶろくや甘酒の販売など多角的に展開している。新型コロナウイルス感染症パンデミック以降は飲食店の営業が難しくなり、主に自家栽培米を用いた弁当の生産販売へ移行している。

両者に共通していたのは地産地消への強いこだわりと、原材料の質を重視する姿勢であった。一方で、新規参入の障壁として、農業の季節性に起因する原材料と時間の確保、労働力の不足、販路開拓、保健所等の認可手続き、経理知識の習得、クレーム対応などが挙げられた。今回の調査から、農家が単独で全工程（1次・2次・3次産業）を担うことの困難さが浮き彫りとなった。今後の展望として、技術向上や資金調達を支える「ネットワークによる人づくり」、事業を継続させるための「仕組みづくり」、そして地域外も見据えたマーケティングに基づく「売る場所（市場）づくり」の3点が極めて重要であるという示唆を得た。



農家さんにインタビュー



6次化商品づくりの課題について話し合う

4.3 ものづくり企業と地域貢献

8月7日、ビジネスを通じて地域貢献に尽力されている地元企業2社を訪問した。

一社目の古川プラスチックは、1979年の創業以来、射出成形加工（金型を用いた成形法の一つ）を主軸に、プラスチック製の日用品や雑貨、漆器の素地などを幅広く製造している。同社は2024年に企画開発した赤べこのプラモデル「べこぶら®」でも広く知られる存在だ。

古川孝治代表は、バイオマスプラスチックについて学びながら「べこぶら」作りを体験できる市民講座を精力的に開催しており、次世代へものづくりの楽しさや環境配慮の大切さを伝える活動に心血を注いでおられる。今回の視察が縁となり、ゼミ生2名が卒業研究として取り組んだ「河東産アスパラガス調整残渣（切り下）」の利活用についても、多大なご尽力をいただいた。



古川プラスチックを見学



アスパラ調整残渣を利用した「べこぶら®」試作品

二社目の株式会社サンブライト（会津河東工場）は、カメラや半導体製造装置の精密部品加工、特に世界最軽量の実用金属であるマグネシウム合金の加工において高い技術力を誇る企業である。1991年に創立された同社の本社工場は、もともと福島県大熊町に所在していたが、東日本大震災に伴う原発事故の避難指示により移転を余儀なくされた。

渡邊忍代表取締役社長によれば、移転先探しが難航していた折、救いの手を差し伸べたのが会津若松市であったという。震災から今日まで事業を継続できたことへの恩返しとして、会津塗の伝統工芸企業と連携し、マグネシウム製の櫛「あいくし」を開発。伝統的な質感と現代的な多色展開が融合したデザインは、特に女性の感性に響く魅力的な逸品であった。

また、同社が掲げる「社員が安心して働ける職場づくり」への姿勢も非常に印象深い。飲み会補助や誕生日休暇、有給休暇の取得奨励といった福利厚生に加え、キャリアパス制度の充実や実質的な定年制の撤廃（希望すれば80歳まで勤務可能）など、少子高齢化による人材不足を見据えた先進的な取り組みが実践されていた。



(株)サンブライト会津河東工場を見学



色とりどりのあいくしを手に取り心が弾む女性陣

両社の見学を通じ、経営者の方々のものづくりに対する真摯な情熱と、社員や地域社会を慈しむ温かなお人柄に触れることができた。こうした素晴らしい企業が地元にあることを、私たち若い世代が中心となってさらに発信していきたいと強く感じた。

4.4 地域コミュニティの活動

8月6日、高齢者の生きがいづくりと地域交流を目的とした東高野地区の地域サロン「さくら会」の活動を視察した。当日は、スカットボール（ゲートボールとパターゴルフを掛け合わせた室内軽スポーツ）による交流が行われていた。ゼミ生全員が初体験であったが、スティックでボールを打ち、得点穴を狙うシンプルなルールは親しみやすく、穴の特殊な形状がもたらす予測不能な展開に会場は大いに盛り上がった。筋力を過度に必要としないため、高齢者が無理なく参加でき、かつ真剣に楽しめるレクリエーションとして、地域交流に欠かせない役割を果たしている。

人口減少が進むなか、サロン活動の継続が困難な地区も増えているが、さくら会ではメンバーシップを限定せず、近隣の小規模地区の住民も参加できる柔軟な運用を行っている点が非常に印象深かった。定年退職後の孤立や、身体機能の低下に伴う閉じこもりを防ぐためにも、高齢住民が定期的に集い、笑い合える「通いの場」としてのサロンの重要性を、身をもって実感する貴重な機会となった。



さくら会のメンバーと一緒にスカットボールを楽しむ

11月8日は、河東地区文化産業祭に参加し、各ブースの視察を通じて地域活動を担う諸団体の方々から話を伺った。

会津若松市食生活改善推進協議会第5班（旧「ラズベリーの会」、通称「食改さん」）は、地域住民の健康増進を目指し、精力的な活動を展開している団体である。当日は河東産米の食べ比べブースを出展されており、私たち成澤ゼミも同ブースにて、卒業研究に関連した「河東産アスパラガスのポタージュスープ」の試飲会を共同開催させていただいた。

現在、16名の会員が2グループ体制で運営しており、「減塩・減糖で健康に」というスローガンのもと、食生活の見直しと減塩の普及に注力しているようだ。保育所や幼稚園での食育、地域内交通「みなづる号」の乗車体験イベントへの協力など、他団体との連携にも積極的だ。一方で、若年層の会員不足による後継者確保が喫緊の課題となっており、いかに活動を次世代へ継承していくかが検討事項となっている。

福祉ボランティアグループ「風っ子」は、地域住民と障がいを持つ方、及びそのご家族との交流を軸に活動している。春のハイキング、夏祭り、秋のボーリング大会から冬の団子さしまで、四季折々の交流行事を主催するほか、共同作業所やグループホームの支援など地域福祉の充実に大きく寄与している。こちらの団体においても、食改さんと同様に、若い世代のメンバー不在が継続的な活動における共通の課題として挙げられていた。

「会津河東史談会」は、河東地域の歴史・文化財の調査研究を行っている。地域内には史跡に加え、貴重な版画や巻物などが多く現存しているが、その価値が住民に十分に浸透していない現状にあるという。眠っている歴史資源をいかに周知・活用していくかが、今後の地域づくりの鍵になると感じられた。



文化産業祭の食改さん&会津短大ブース



文化産業祭にて史談会に話を伺う

翌11月9日には、岡田地区の収穫祭に参加させていただいた。河東地域のなかでも、岡田地区は地域の活動に参加する若い世代が比較的多く、伝統行事も継承されており、活気のある地区だと聞いて伺った。

この収穫祭は年に一度開催される伝統行事で、当日は50～60人ほどが集まり盛会であった。午前中は防災訓練と炊き出しの手伝いをおこない、地元産の打ちたての蕎麦を切ったり、餅をついたり貴重な経験をさせていただいた。昼からは豊作に感謝しながら昼食を共に

し、ビンゴ大会にも参加した。高校生から高齢者まで幅広い年代の方々と交流し、様々な話を伺うことができた。

また、岡田地区では婦人会の活動が現在も継続しており、当日も幅広い年代の女性たちが炊き出しで活躍している姿が非常に印象的であった。



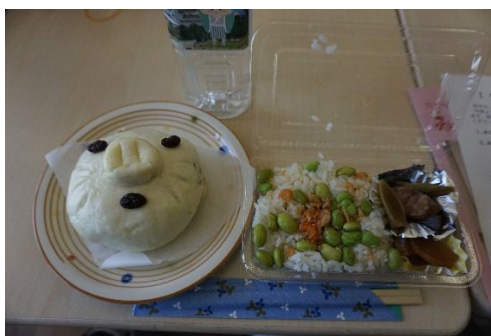
岡田地区収穫祭にて餅つき体験



岡田地区収穫祭にて防災訓練に参加

5月13日、河東地域づくり委員会の交通環境部会が主催する「みなづる号 de こびるにすんべ!」に参加した。同イベントは、地域住民から参加者を募り、地域内交通「みなづる号」の乗車を体験して、ものづくりをしたり、おやつを食べて交流するもので、昨年度から定期的に開催されている。今回は、食改さんのメンバーの方が料理講師となって豚まんづくりの教室がおこなわれていた。

みなづる号は、地域内に設けた待合場所と店舗や医療機関、行政機関等の目的地をつなぐ完全予約制のバスで、買い物や通院など住民の日常生活に必要な移動手段を確保するため2018（平成30）年4月より運行されている。利用者があまり増えない要因として、前日予約制と運行時間の融通の利かなさなどを改善するといった運用上の課題を抱えているそうだが、家族や自分自身が高齢になったときの免許返納を考慮すると、こうした地域インフラの維持は重要なので、住民が利用しやすいような制度設計について若者も自分事としてアイデアを出していきたい。



みなづる号の広報をかねた料理教室で作られた、美味しくて見た目もキュートな豚まん

5. 地域課題と提案

以上の主な調査結果をもとに、河東地域を支える人びとの実態や、活動を通じて得られた学び・気づきについて、河東地域づくり委員会のメンバーの方々と意見交換を行った。

5.1 活動前のイメージと実態

活動前に私たちが抱いていた河東地域のイメージは、豊かな自然環境と盛んな稲作、高度な技術を持つ企業の集積、そして「冬木沢詣り」や「皆鶴姫伝説」といった独自の文化が息づく地というものであった。しかし、実際の調査を経て浮き彫りになったのは、こうした豊富な歴史的・文化的資源が地域外に十分に周知されていない現状と、地域行事を支える「担い手不足」という深刻な課題である。

人口動態の変化に伴う担い手不足の背景には、主に二つの要因がある。第一に、若年層・中年層の減少である。進学や就職に伴う市内外への流出に歯止めがかからず、地域コミュニティを支える現役世代の層が極めて薄くなっている。これにより、行事の運営や自治組織の役職を担う人材が慢性的に不足し、活動主体が高齢者に偏ることで、運営負担の増大や活動の硬直化を招いている。第二に、「還流（Uターン）」の弱体化である。若者世代の定着が進まないだけでなく、定年退職後の中高年層の帰郷も減少傾向にあり、地域を支えるはずの経験豊かな人材の確保も困難な状況にある。

5.2 地域の強みと新たな可能性

担い手不足は単なる人口の問題にとどまらず、地域活動への参画意識の希薄化も影響している。そのため、多世代交流の促進や、若者が地域に関わりたくなる仕組みづくりが急務である。一方で、河東地域の強みも再確認することができた。世界水準の技術力を誇り、地域貢献に邁進する企業群、そして高品質な米を育む農業基盤は、この地域が誇るべき唯一無二の財産である。若手農家へのヒアリングでは「6次産業化への関心はあるが、繁忙期のためアイデアを形にする余裕がない」という切実な声も聞かれ、学生による企画支援の余地が示唆された。また、本学の卒業生がデザインを手がけたご当地キャラクター「皆鶴姫」の存在も重要である。これを地域おこしのコンテンツとして再定義し、既存の産業や文化と掛け合わせることで、新たな価値を創造できる可能性を強く実感した。



ご当地キャラ「皆鶴姫」のフォトスポット 「会津若松皆鶴姫まつり」にて凍み餅を販売

5.3 活性化策の提案

名物料理の開発と「食・体験」の連動

私たちは、河東産米の魅力を最大限に引き出した「新たな名物料理」の開発と普及を提案する。本提案では、学生が柔軟な発想でアイデアを出し、専門家によるレシピ化を経て、地域行事での振る舞いやマルシェでの販売を通じた普及を目指す。

一級品の米を活用し、若年層にも支持される現代的なメニューを開発するだけでなく、レシピ講座や料理教室といった「体験型企画」を積極的に展開する。単なる消費にとどまらず、調理や体験を通じて地域の魅力を直接発信することで、河東地域への愛着や関係人口の創出を図る。

ご当地キャラクター「皆鶴姫」とのシナジー

広報戦略においては、ご当地キャラクター「皆鶴姫」を積極的に活用したい。この「皆鶴姫」は、「河東の米で作られた餅やおにぎりが大好物」というキャラクター設定を持っており、開発した料理の PR 媒体として非常に親和性が高い存在である。料理の普及とともに「皆鶴姫」のファンを地域内外に増やすことで、キャラクターと地域資源が相乗効果を生み、多角的な情報発信が可能になると考える。

これまでの実績と今後の展望

今年度、当ゼミでは別プロジェクトにおいて、伝統的な「凍み餅」を現代風の味や食感にアレンジした商品（商品名：「皆鶴姫のおやつ」）の開発を手がけた。この開発プロセスで得た知見やノウハウを本事業に直接活かすことで、より実効性の高い地域貢献活動を展開できると確信している。

6. おわりに

8月の調査では、近年河東地域に移住したフランス出身の20代男性に話を伺う機会を得た。彼は自ら購入した家をリフォームし、リモートワークをおこないながら、自転車で地域の祭りや観光地を巡っている。集落の人足活動（共同作業）にも積極的に参加しており、その言葉の端々からは地域への深い愛着が感じられた。飲食店や娯楽施設の不足、デジタル化の遅れといった不便な側面はあるものの、豊かな自然環境や歴史的魅力に恵まれたこの地域は、住民の生活満足度も高い。地域の魅力を再発見し、既存の資源の有効活用や新たな資源の創出に取り組むことで、地域はさらに活性化するはずである。

今年度の調査活動を通じ、本報告書に記した事柄以外にも、多くの方々から貴重な知見をいただいた。そのなかで、河東地域づくり委員会との対話から、上述の提案に加え、以下のような多様なアイデアが想起された。例えば、次世代への継承と「居場所」の創出に向けては、子どもたちが地域の歴史や文化に触れ、愛着を育める環境を整える。現在は活用されていない河東支所の空きスペースを、飲食や学習を楽しめる明るい「コミュニティ・スペース」へと刷新し、歴史展示を併設するとともに、住民が講師を務める「子ども向けものづくり教

室」を通じて多世代交流と伝統技術の継承を図る。また、難解な資料に代わり、誰もが気軽に読める「皆鶴姫」の紹介冊子などを制作することで、地元の歴史を地域のアイデンティティとして再定義する。観光・広報戦略では、SNS や動画を用いて各集落の一年に密着したドキュメンタリーを配信し、暮らしの温度感を伝えて地域の認知度を高める。あわせて、制作中の観光マップを活用した学生ガイドによる歴史ツアーや、広田駅での屋台イベント等を実施し、関係人口の創出を目指す。さらに「河東ブランド」を確立する食・農プロジェクトとして、雪合戦やオリエンテーリング等の体験型イベントを開催し、そのフィナーレで米を用いた「新名物料理」をキッチンカーや音楽演奏とともに提供することで、老若男女が集う新たな食文化と経済の循環を生み出していく。

これらのアイデアのうち、ゼミ生による一年間という期間内での実行可能性を考慮して絞り込んだものが、前節の提案策である。本提案を既存の地域活動と有機的に結びつけ、住民が主体となって継続できる仕組みを構築することが肝要である。私たちは「食」と「体験」を軸とした活動を通じて河東地域の多面的な魅力を発信し、持続可能な発展に寄与したいと考えている。

謝辞

今年度の調査活動を無事完遂することができたのは、河東地域づくり委員会をはじめ、委員の皆様の多大なるご支援があったからこそと、深く感謝申し上げます。また、地域との架け橋となってくださった河東支所職員の皆様、ならびに、ご多忙中にもかかわらず早くインタビューに応じてくださった地元企業および住民の皆様、ご支援をいただいた福島県地域振興課の皆様に厚く御礼申し上げます。

皆様から頂戴した貴重なご意見と温かいご協力に対し、ここに記して、心より感謝の意を表します。

参考資料

- ・河東地域づくり委員会（2021）『河東地域づくりビジョン 令和3年度～令和7年度』
https://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2020052600049/file_contents/kawahigashivision.pdf（最終閲覧日：2026年2月28日）
- ・河東地域づくり委員会（2025）『河東地域づくり委員会ニュース みんなでやっぺ！』第57号
https://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2024070200038/file_contents/2510.pdf（最終閲覧日：2026年2月28日）
- ・河東地域づくり委員会（2026）『第2期河東地域づくりビジョン 2026年4月～2031年3月 素案』
https://www.city.aizuwakamatsu.fukushima.jp/docs/2026020500014/file_contents/2nd_kawahigashi_vision_080217.pdf（最終閲覧日：2026年2月28日）